

卒業論文要旨

マルティン・ハイデッガー『芸術作品の根源』における詩作について

令和3年度入学

人文社会学科昼間主コース

人文学履修コース

指導教員名：山本與志隆

氏名：西澤光貴

【卒業論文要旨】

マルティン・ハイデッガーは20世紀ドイツにおいて活動した哲学者・思想家である。彼の思想は当時からしても目新しいものであり、その著作は多くの人々の目に触れることとなった。現在においてもその思想は褪せることなく、より核心的・前衛的な解釈を求めて盛んに研究が行われている。『芸術作品の根源』は、1936年フランクフルトにてハイデッガーが行った芸術論講演の内容が記された著作である。この著作においてハイデッガーは、従来の美学の文脈とは異なった芸術について作者でなくその作品そのものを主軸とする独自の視点から論究を展開し、芸術とは、存在するものが「存在する」という真理を生起させるものであると解釈づけた。しかし、この芸術解釈を肯定する上で『芸術作品の根源』には課題が存在している。それはハイデッガーが、芸術は本質として詩作であり、また詩作と言葉の連関から詩は他の建築芸術や造形芸術といったあらゆる芸術に対して卓越的であると主張している点である。もちろんここにおける詩作や言葉といった語句は一般的意味内容でなく、ハイデッガーの解釈をもとにあらゆる存在するものの「存在すること」の真理に関わる拡張された意味内容を有している。しかしながら、依然としてこの主張の妥当性は疑わしいものに留まっている。

そこで本論文では、ハイデッガーの芸術と詩作、詩に関するこの主張に対して改めて結論づけるべく、ハイデッガーが『芸術作品の根源』内で展開した芸術作品の本質的諸性質及び動向を「立てること〔Stellen〕」の観点から、作品のそれ自体の内に立つこと〔Insichstehen〕、一つの世界を開けて立てること〔Aufstellen〕、大地をこちらへと立てること〔Herstellen〕、真理が形態へと確立すること〔Feststellen〕の4段階に整理し、各段階において言葉がどのような関係を有しているのかについて解釈を行った。

解釈の末、一つの世界を開けて立つことにおける世界は言葉と本質的に密接な関係にあり、その世界と対向的關係を為す大地は言葉と対照的であると結論づけた。また、この世界と大地の言葉との関係から、世界と大地の対向的關係から導出される真理の形態への確立の段階においても言葉は本質的な位置を占めていると考えられる。以上から、芸術作品はその本質的な性質において言葉を含んでおり、故に芸術を詩作であるとするハイデッガーの主張に対して一定の妥当性が保証されたのではないかと述べた。

しかし、詩の卓越性に関しては異なる見解を示した。ハイデッガーによる詩の卓越性に関する主張では、芸術に対してどこまでも存在の真理を生起させることが主題として論じられている。しかし一方で作品には、作品のそれ自体の内に立てることを基に展開された性質として、作品を鑑賞する人間を日常的な連関の中から存在するものがただ存在しているという地平へと連れ出すという側面も存在する。この性質を主軸に据えるのならば、最も日常的な把握手段である言葉を用いない詩以外の芸術に卓越性が見出される。そのため、ハイデッガーが主張する詩の卓越性は決して絶対的なものではないと結論づけ、これを本論文の結びとした。

【参考文献】

- Martin Heidegger (1960): *Der Ursprung des Kunstwerkes*. Stuttgart: Philipp Reclam jun.
マルティン・ハイデッガー著, 木下康光、ハイリンヒ・レトチアック訳 (1986) 「ヘルダーリンの讃歌『ゲルマーニエン』と『ライン』」『ハイデッガー全集』39 創文社
マルティン・ハイデッガー著, 細谷貞雄訳 (1994) 『存在と時間』筑摩書房
マルティン・ハイデッガー著, 濱田恂子、イーリス・プラハイム訳 (1997) 「ヘルダーリンと詩作の本性」『ハイデッガー全集』4, pp. 45-66 創文社
マルティン・ハイデッガー著, 川原栄峰、セヴェリン・ミュラー訳 (1998) 「形而上学の根本諸概念」『ハイデッガー全集』29/30 創文社
マルティン・ハイデッガー著, 関口浩訳 (2008) 『芸術作品の根源』平凡社
マルティン・ハイデッガー著, 関口浩訳 (2009) 『技術への問い』平凡社
ハイデッガー・フォーラム編 (2021) 『ハイデッガー事典』昭和堂
秋富克哉 (1996) 「「詩と哲学」と「思索と詩作」—シェリングとハイデッガー—」『シェリング年報』4, pp. 15-24
内山勝利編 (1996) 『ソクラテス以前哲学者断片集 第I分冊』岩波書店
川合大介 (2003) 「芸術作品における闘争—ハイデッガー『芸術作品の根源』より—」『成城文芸』182, pp. 77-59
石黒義昭 (2002) 「ハイデッガーの大地概念」『美学』52, 4, pp. 1-14
小林信之 (1990) 「詩作と言葉 —M・ハイデッガーに即して—」『美学』42, 1, pp. 36-47
小柳美代子 (1991) 「存在の亀裂 —ハイデッガーにおける真存在の「亀裂」(Zerklüftung)を巡る問題性—」『哲学』1991, 41, pp. 166-176